

福井県医師会

だより

第526号 平成17年(2005)4月



表紙写真説明：染まりゆく散居村

田に水が入り、稲が植えられるまでの限られた期間のよく晴れた夕方にだけ、この景色を見ることが出来ます。砺波平野を一眺出来るこの高台に三脚を立て、完全に日が沈むまでの3時間程を幸せな気分で過ごしました。

鯖江市 今野 利男

## 神経科精神科医会の歩み

福井県神経科精神科医会会长 和田有司



福井県神経科精神科医会（以下、医会）について、精神科以外の先生方への紹介もかねて、これまでの歩みと現況を報告させていただく。まず略史であるが、第1回の医会が産声をあげたのは昭和56年8月29日であり、市内のホテルで総会に引き続いて山口成良金沢大学教授（当時）による「DSM-と抗精神病薬の血中濃度」と題する特別講演が行なわれた。その際、医会の会則も定められ、第2条に「本会は会員の神経精神医学の知識の向上、医療内容の充実をはかると共に、会員の相互の理解、親睦を深め、もって県下の神経精神医療の健全な発展に寄与することを目的とする。」とある。

医会誕生にいたる胎動から平成7年の第50回までの経緯については、前会長である伊崎公徳先生による詳細な記録が残されている。これによれば、本会は2つの泉から誕生した。ひとつの源流は昭和35年より続いている「福井県精神病院懇話会」の流れであり、他の一つは昭和44年のいわゆる「金沢学会」（第66回日本精神神経学会）から続く混沌とした情勢の中で、県下の精神科医の交流の輪を広げる必要性があったことが述べられている。なお前年の昭和55年4月には福井医科大学（当時）も開学しており、大学も含めた交流の場を新たにつくることも医会の発足を促したものと思われる。

このような流れの中で、今年の3月の講演会で91回をかぞえるが、講演の内容としては、精神薬理学、画像診断などの最近の脳科学研究から家族教育や認知療法などの社会心理学的アプローチまでの広い領域をバランスよく網羅し、日々の診療に役立つ実践的なテーマを講師の先生方にはお願いしている。第1回の参加者は13名であったと記されているが、現在の会員数は80名と着実に増加

している。さらに講演会の内容によっては、看護、心理、作業療法などに携わるスタッフの参加も多く、会則にある「会員相互の理解と親睦」という当初の目的の一つはある程度達成されてきていると思われる。

その一方で、もう一つの柱である「知識の向上と医療内容の充実」という点では課題が多い。現在は年に4回ほど開催する講演会が主な事業になっているが、今後は学校や職場のメンタルヘルス、地域における研究調査活動、市民フォーラムなどの啓発事業、コ・メディカルとの連携強化、など活動すべき領域は尽きない。

最近の精神科における最も重要な出来事として、教育面での変化があげられる。一つは精神科専門医制度の実施がようやく決定したことである。もう一つは卒後臨床研修に伴う精神科研修の必修化であり、この4月からは精神科臨床でのローテーションが始まる。医会も今後はこれらの2つの変化を視野に入れて活動を進めていくことが必要になってくるが、とくに卒後の精神科研修は、精神医学・精神医療を理解する一般科の医師を生み出すためのほぼ唯一の機会と位置づけて、対応することが求められると考えている。この研修を通じて、精神医学が正しく理解され正に評価されるようになり、このことが地域の精神医療の発展につながるであろうし、何よりも精神疾患に対するステigmaの軽減にも大きく寄与することが期待できる。

このように24年前に掲げられた医会の会則に示された趣旨が、今回の教育面での変化を追い風として、より具体的な形で実践されようとする時代を迎えており、今後とも他の医会と連携し、福井県医師会の活動に貢献できればと考えている。